慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「31年テーゼ草案」と「32年テーゼ」に関する談話
Sub Title	An oral evidence on the communist movement in prewar Japan
Author	寺出, 道雄(Terade, Michio)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2011
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.104, No.1 (2011. 4) ,p.131- 142
JaLC DOI	10.14991/001.20110401-0131
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20110401-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」104巻1号（2011年4月）

資　料

「31年テーゼ草案」と「32年テーゼ」に関する談話

寺　出　道　雄

(1)　はじめに

本稿では，別稿「「第一次共産党」に関する聞き取り稿本」「戦前期日本共産党に関する聞き取り稿本」[(i)]と同じく，慶應義塾が所蔵する現代史資料である，「水野資料」の中から，戦前期の日本共産党史に関する史料である，談話記録「「三一年テーゼ草案」の成立と「三二年テーゼ」による克服」を紹介する。

それは，謄写版刷りの印刷物であるが，次節で述べるように，極めて限定された範囲内で流通したものであると考えうる。

(2)　史料について

1.　史料の外観と史料の位置

1　本稿で紹介する，談話記録「「三一年テーゼ草案」の成立と「三二年テーゼ」による克服」は，B5判のわら半紙表裏，計5ページを用いて，謄写版によって，各ページを上下二段に分割して縦書きされて印刷され，ホチキスで綴じられている。

その成立の由来は明らかでないが，「水野資料」の性格からして，それは，戦後の日本共産党の本部において，戦前の党史に関する基礎資料を作成した成果の一部であろうと推定できる。また，その謄写版によって印刷された談話が配布された範囲は，同じく「水野資料」の性格からして，当時の党史作成関係者のみであったであろうとも推定できる。

2　話者である宮川は，その談話を「私の話そうとするところは，……」と始めている。一方，その談話の謄写版刷りの「ガリ切り」の技術は高い。したがって，それは，宮川の談話を，「ガリ切り」に熟達した関係者が，謄写版

(i)　それぞれ，本誌，103巻1号，2010年。103巻3号，2010年。

刷りの資料に仕上げていったのであろうと推定できる。その場合，談話の文章は，単なる筆記記録としては完成度が高く，逆に，正式に書かれた原稿としては完成度が低い。したがって，それは，宮川の談話を，党史資料についての関係者が原稿にしたものであろうと推定できる。それに宮川自身がどの程度「手を入れた」のかは不明である。したがって，この談話の文書としての著作者は確定しがたいことになる。

なお，史料の末尾には，「一九五五・一〇・一五」という日付が入っている。それが，談話のなされた日付であるのか，史料の「発行日」の日付であるのかは明らかでない。いずれにせよ，その日付は，いわゆる「50 年問題」によって分裂した日本共産党が，統一を回復していく契機となった「第六回全国協議会」（「六全協」）の開催（1955 年 7 月 27–9 日）から遠くない時点にあたる。

この史料は，――終戦から大きな時間を経ずに作成された，前記の 2 つの史料とは異なり――いったん分裂した共産党の，統一に向けての党内論争や妥協が行なわれていた中で，同党の関係者たちの間に，戦前の同党の歴史を総括する動きが生まれていたことと関連しているのであろう。

2. 史料の話者

ここでは，史料の話者である宮川寅雄と，彼が，史料中で資料として利用している「手記」の筆者である，風間丈吉の略歴をあげておく。(ii)

宮川寅雄（1908–1984）

宮城県に生れる。早稲田高等学院を経て，早稲田大学政治経済学部に入学。会津八一に傾倒し，東洋美術史を学ぶ一方，1929 年，共青に，30 年ないし 31 年に，共産党に加入。早大を中退。31 年 8 月，同党の中央委員。同年 10 月，検挙。12 月，父の危篤のため一時釈放中に逃亡し，32 年 2 月，中央委員会に復帰。同年 12 月，検挙。懲役 6 年の判決により，40 年まで入獄。出獄後は，会社員生活を送る。

戦後は，共産党に復党。1966 年，和光大学教授に就任。日中共産党の文化大革命時における対立の中で，67 年，共産党から除名。日中文化交流運動に従事する。東洋・日本美術史に関する著作が多くある。

風間丈吉（1902–1968）

新潟県に生れる。高小卒業後上京し，職工に。労働運動に参加し，1925 年，モスクワのクートベに留学。ソヴィエト共産党党員候補を経て，30 年後半に帰国。31 年 8 月，共産党の中央委員，中央委員長。32 年 10 月，検挙。37 年 10 月，獄中で転向を表明。42 年の出獄後，職工生活に復帰。

戦後は，鍋山貞親らと反共活動に従事した。なお，風間（1976）は，史料中に出てくる「手記」にもとづく著作である。

(ii)　略歴は，必要と思われる若干の補正・補足を加えた上で，主に，近代日本社会運動史人物大事典編集委員会編（1997）によった。

3. 史料の背景

1　この宮川談話に述べられた時期は，日本共産党の運動史からすれば，「「非常時」共産党」の時期にあたる。それに先立つ「武装共産党」の極左路線の批判の時期であり，山本正美，野呂栄太郎を指導者とした短い過渡期を経て，戦前の活動の終末期につづいていく，この時期の共産党の運動史については，立花（1983）（二）が詳細である。もちろん，日本共産党中央委員会（1994）（上）も参照されるべきであるが，著者の立場の違いは別として，後者の叙述の密度は，前者に及ばない。また，逆に，ごく短い叙述としては，風間（1976）に付された，栗原「編集まえがき」が，情理ともに備わった，この時期に関しての分かりやすい解説となっている。

2　そこで，ここでは，宮川談話の意義を明らかにする一助として，その表題にある，戦前期の日本共産党の諸「テーゼ」について，その問題に詳しくない読者を念頭において，説明しておく。

戦前の日本共産党の正規の綱領的文書としては，共産党自身の認識によれば，

① 「日本共産党綱領草案」（「二二年綱領草案」）1922 年。

② 「日本問題にかんする決議」（「二七年テーゼ」）1927 年。

③ 「日本における情勢と日本共産党の任務にかんするテーゼ」（「三二年テーゼ」）1932 年。

という，いずれもコミンテルン本部で作成された 3 つの文書がある。

本稿で話題にあがっている，

「日本共産党政治テーゼ草案」（「三一年テーゼ草案」）1931 年。

は，正規の綱領的文書としては扱われていない。

当時，コミンテルンは，資本主義の発達度が中位である諸国について，その発達度に応じて，直接に社会主義革命を目指すべき，より進んだ諸国と，まず，ブルジョア民主主義革命を目指し，その後に，それを社会主義革命に転化させることを目指すべき，より遅れた諸国に分類していた。前者の戦略は「一段階革命論」と，後者の戦略は「二段階革命論」と呼ばれた。

日本のマルクス主義者にとっては，日本では「一段階革命論」と「二段階革命論」のいずれが正しいかは，革命理論上の大問題であると考えられていたのである。非共産党系のマルクス主義者たち，いわゆる「労農派マルクス主義」の人々が前者を主張し，共産党系のマルクス主義者たち，いわゆる「講座派マルクス主義」の人々が後者を主張したことは，よく知られている。(iii)

事実，先にあげた①～③の綱領的文書は，すべて「二段階革命論」を説いていた。しかし，②の「二七年テーゼ」における日本の現状分析は，かなり「一段階革命論」のそれに近づい

(iii)　以上の点については，寺出（2008a）（2008b）を参照。また，問題の「三一年テーゼ草案」「三二年テーゼ」と『日本資本主義発達史講座』との関係については，上記（2008a），および（2008b）の「補章」を参照していただきたい。

たものであった。そうした中で，1931 年に，基本的には「一段階革命論」を説く，「三一年テーゼ草案」が発表されたのである。

こうした共産党の方針のブレには，無理からぬ点があったことも事実である。それまで，基本的には農業国であるとともに，工業部門においても繊維産業等の軽工業が中心であった日本資本主義において，第一次世界大戦のころからは重化学工業化が進みだしていた。そうした，日本資本主義の新しい動向に着目すれば，「一段階革命論」を説くことに道理はある。しかし，そうした新しい動向にもかかわらず，後発の日本資本主義の発達度が，先発の欧米諸国のそれとは画然とした格差をもっていたことを重視すれば，「二段階革命論」を説くべきことに道理があることになる。

——もちろん，著者は，「三一年テーゼ草案」[iv]と「三二年テーゼ」[v]のどちらがより正しかったのかといった，80 年も前の「戦略論争」そのものに拘わる意思はない。むしろ，著者は，本史料の紹介にあたって，80 年の時間を経て，今日では，その 2 つの文書を，日本近代史ないし近代思想史上の重要な文献として，等価と見なしうる地点に立っているのではないか，と考えている。

3　ところで，そうした，共産党の立場からすれば正統的であるとされた「二段階革命論」の中でも，「三二年テーゼ」における議論の特質は，日本社会において天皇制の果たしている役割について特別の強調がなされていることである。そこでは，天皇制は，「地主」と「ブルジョアジー」という 2 つの階級と「極めて緊密な永続的ブロック」[vi]を結んでいるとされる一方，「日本の天皇制は，その独自の，相対的に大なる役割と，似而非立憲的形態で軽く粉飾されているに過ぎない，その絶対的性質とを保持している」[vii]とされている。

こうした「三二年テーゼ」におけるいわゆる「絶対主義的天皇制」論は，その後，マルクス主義者の範囲を超えて，多くの日本の知識人の日本社会理解に，深い影響を与えていった。

しかし，社会運動という面からいえば，当時の日本で，「天皇制の転覆」[viii]といったスローガンを前面に押し立てれば，どんな運動も「大衆性」をもちえなくなってしまうことも明らかであった。「三二年テーゼ」における天皇制論は，共産党の一層の孤立化の原因ともなったのである。[ix]

なお，以下では，中央委員として「三一年テーゼ草案」に賛成した宮川であるが，「「三

(iv)　石堂・山辺編（1961）pp.46–75。なお，「三一年テーゼ」の原案の作成については，立花（1983）（二）pp.16–20 を参照。
(v)　同上，pp.76–101。
(vi)　同上，pp.81–2。
(vii)　同上，p.82。
(viii)　同上，p.85。
(ix)　特に，共産党が労働運動の組織である日本労働組合全国協議会（全協）に，いわゆる「天皇制打倒綱領」を採択（1932 年 9 月）させたことは，全協への弾圧の強化と，その一般労働者からの孤立をもたらした。

二年テーゼ」こそ正しい」，という正統的な立場にたって談話がなされていることに注意しておこう。[x]

4. 凡例

「凡例」は，基本的には前記の２稿と同一である。ここでは，その繰り返しを含めて，以下の点を特記しておく。

1. 原文では，「ガリ切り」用の略字が用いられていることが多い。それらは普通の字体に統一した。

2. 原文では，話者による注の指示は，各所に（＊）（＊＊）で付されている。それらは上添えで表した。注の内容は，本文の各段落の終わりに，本文より下げて，同じポイントの活字で掲載した。

3. 単行書名・新聞名は，『・』を付けて統一した。論文名・論文的な文書名（各「テーゼ」を含む）は，「・」を付けて統一した。組織名には基本的には「・」を付さなかったが，一部例外もある。

4. 原文における明らかな句読点の脱落を補足したところがある。逆に，明らかに不要な句読点を略したところもある。原文の文意を損なわない範囲内で，句点を読点に，読点を句点に換えたところもある。

5. 原文における単純で明らかである誤字については訂正し，重要な誤字・誤記については，「ママ」を付し，その直後の（・）内に正しいと思われる字を記載した。

6. 原文では，「コミンテルン」と「コミンタン」，「クートベ」と「クートヴェ」という表記が併用されている。それらは，従来の慣用にしたがい，それぞれ「コミンテルン」「クートベ」に統一した。

7. 上添えの（・）による注は，著者によるものである。その場合，人名については，各種の社会運動関連の人名辞典で検索が容易な，日本人の人名には注を付さず，あまり知られていないコミンテルン関連の外国人の人名にのみ注を付した。

(3) 史料

「三一年テーゼ草案」の成立と「三二年テーゼ」による克服

宮川　寅雄

私の話そうとするところは，一九三〇年半ばから三二年終頃にかけて，即ち，プロフィンテルン第五回世界大会が開かれて極左方針が批判されてより「三一年テーゼ草案」成立の過程を経て，「三二年テーゼ」で批判克服されるまでについてのことである。資料として風間丈吉の警察内での自筆の「手記」を使うが，これはかなり正確なものであると思う。風間は一九三二・一〇・三〇に検挙され，警察でこれを書き，三三・三・一四に書き終えている。このとき彼はまだ転向の表明はしていない。文中の頁数は，この「手記」の頁を指す。

服部之総の福島大学での講演（「マニュファクチャ論争についての所感」一九五二・七・五――『商学論集』二一巻三号，『服部之総著作集』第一巻

(x) もっとも，前述の略歴にもあるように，後年の宮川は，党とは異なった道を歩むことになるのだが。

所収）によれば，野呂栄太郎だけが「草案」にわざわいされなかったとあるが，これは誤りである。野呂も最初は「草案」を決定的なものとして，これに賛意を表し，従来の見解を改変しようとした。獄中からは，三田村，鍋山，志賀らが問題にし，渡辺義通を仲介にして岩田がうけついだ。

「三一年テーゼ草案」は三〇年の終に帰国した風間が紺野，岩田の協力をえて，三一年の秋（ママ）（春か）までかかって作成，全党的討議を経た方針である。三〇年秋頃風間がモスクワで岩尾家定らと構想検討の過程では，山本懸蔵が「慎重に審議すべし」とは云ったが，積極的な反対はしなかった。（三〇〇頁）この「三一年テーゼ草案」の方針を批判しはじめたのは，その年の秋以後であった。その後帰国した源五郎丸芳晴(*)（共青代表で一九三一年派遣）がKI(1)の意見を伝達し，さらに山本正美（アレキセーフ(2)）は三一年終か三二年初（月不詳）に『インプレコール(3)』に批判論文を掲載した。

（*）一九三二年の二月以降の帰国と記憶している。

これより先，一九三〇年七月十五日，大検挙があって田中清玄，佐野博，岩尾家定，今本をはじめ大部分が検挙され，中央部では残ったものがなかった。当時は極左方針のため党の門戸は極度に狭く，入党するには，学生の場合を例にとっても学生戦士→共青→党と云うコースを歩まねばならず，中々入党できなかった。機関紙にはわずかに『第二無新』『無産青年』がある程度だった。残ったものとしては鈴木麟三（共青）神吉（東大学生）阿部隆司（安田――古くからの産労の活動家）らであった。一九三〇・八・一五～三〇にわたってモスクワにプロフィンテルン第五回大会が開かれ，日本からは代表団として紺野与次郎（団長・モスクワ時代金子），大井昌，児玉静子（殿田），飯島キミ（倉方）で，「刷同(4)」の南巌（野崎）も，出席を許された。ただし議決権は持たなかった。それに通訳として在ソしていた蔵原惟人，風間丈吉が出席した。日本委員会は，ロゾフスキー(5)が指導し，山本懸蔵も出席した。日本代表は南巌と対立して討論したが，ジョンソン(6)の最終発言で「刷同」解散が決定した。南巌は最後にそれまで否認していた「解党派(7)」との関係をも告白し，自己批判した。

---

(1) Die Kommunistische Internationale, 1919–43 年刊行。

(2) 以下，日本語での名前の直後の（・）内は，モスクワ滞在時，特にクートベ在学時，あるいは日本国内での変名である。なお，論文の著者名の場合，逆に，（・）外がペンネームで（・）内が本名であることがある。

(3) Internationale Press-Korrespondentz, 1921–33 年刊行。

(4) 日本労働組合全国協議会（全協）の武装路線を批判して，1930 年，神山茂夫らが結成した「全協刷新同盟」のこと。コミンテルン本部は，共産党中央と全協中央を批判するとともに，「刷同」の解散を命じた。

(5) Lozovsky, S. A.（1878–1952）。ロシア人。当時のコミンテルンの幹部。

(6) Johnson, C.（生没年不詳）。ラトヴィア人。当時のコミンテルンの幹部。1925–7 年には，コミンテルンの日本駐在代表（非合法）を務めた。

(7) 「日本共産党労働者派」を名乗った，水野成夫を中心とした分派。獄外では，1930 年に結成された。

一九三〇・九・二四の『第二無新』には西欧書記局五月発表の,「日本に於ける経済的危機とストライキ運動」なる論文が翻訳掲載された。これは日本における革命的労働組合の諸任務と，その方向転換について指摘したもので，重要な意義をもつものである。渡部徹『日本労働組合運動史』によれば，五・二一『無産青年』の「吾同盟の極左的傾向と闘へ」，五・二九『労働新聞』の「最近に現れたる全協の極左的傾向と闘へ」，六・二『第二無新』の「ボルシエヴィキ党の再建と極左的傾向に対する闘争」が重要な論文と指摘している。このような形で，党並びに全協の極左方針に対する批判が現れてきていた。しかも，この批判の背後には，プロフィンテルンの席上でなされた，戦略問題としての「二七テーゼ」の改変＝「三一テーゼ草案」的な意見への接近があった。

一九三〇年十一月末頃にクートベから帰国した風間丈吉(*)は直ちに党再建の活動を開始した。産業労働調査所へ行って市川義雄に会い，彼の紹介で岡部隆司（安田）に会った。風間は岡部を通じて党の関東地方の再建に従事していた宮川（牧）（二一五頁）とも連絡がつき，更に帰国した紺野らとも連絡が確保された。(**) 松村（二一六頁）は，岡部，鈴木，宮川らと三〇年秋には連絡がついていた。このスパイＭこと松村（飯塚）(8)は風間より早く帰国，七・一五検挙のとき「大阪にいたので助かった」と自分では云っていたが，戦後の調査によれば，七・一五の検挙に会い，スパイになってはなされていた(9)，と云うのが真相らしい。

（＊）三〇年一〇月初めモスクワ発，ウラジオへ。十一月二十日頃ウラジオ発日本に向う。（二〇二～二一〇頁）

「一九三〇年十一月末頃日本に帰ってから……」（四九三頁）

（＊＊）一九三一年「一月十日頃に同志松村と一緒に同志「岩田」と街頭で連絡した。(10)」（二二六頁）

こうして再建活動の中心メンバーの中にスパイが入りこむようになった。一九三一年一月十二日，風間丈吉（徳川）紺野与次郎（浜田）保釈中の岩田義道（鳥羽）松村（松村）の四人で中央ビューローを結成した。これは『第二無新』全協，共青『無産青年』と関東と関西の若干の党の残存勢力を基礎にして党再建を図ったものである。

当面の仕事は，全協，共青を通じて第五回大会の方針を迅速に伝えることであった。

一月一九日『第二無新』四五号――党中央委員会署名の五九議会闘争についての檄文「第五九議会開会に際して革命的労働者並に貧農小作人に檄す」（風間執筆）を掲載――これには「草案」の思想が多分に入っていた。

一月二三日『労新』一六号，風間丈吉が第

---

(8)　共産党からすれば「最悪」であり，特高警察からすれば「最良」のスパイであった「M」（本名・飯塚盈延）についての，今日，入手が容易な文献として，立花（1983）（二），小林・鈴木（2006）がある。

(9)　この部分の文意は「スパイになって警察から意図的に放免されていた」ということであろう。

(10)　この「手記」執筆時点でも，風間は，「M」こと「松村」がスパイであることを知らなかったことが，この引用から分かる。

五回大会の方針に基き，十五号の西野（溝上弥久馬，全協キャップ）の論文「プロフィンテルン第五回大会の決議を如何に理解するか」の批判を掲載。

二月一一日『労新』一七号，山本懸蔵（？）[11]がストライキの系統的準備と指導，合法主義との闘争のために「社会民主主義的ストライキ闘争及び戦術と闘へ」を掲載。（二二二頁）

二月一〇日『第二無新』四七号，今村春次（風間丈吉）（二五二頁）の名前で，「プロフィンテルンの決定を職場の中で実行せよ」を掲載。執筆は一二月一日。[*]

（＊）「これの書かれた日付は一九三〇年一二月一日になっているが，この日付は或は誤りかも知れないが，時間的に云えば，この論文が第五回大会決議に関するものの中で最初のものであったらしく思われる。」（二二三頁）風間はこの論文の要点を六項目にわたって説明した後，「引用せる諸論文中『労働新聞』紙上発表のものは大部分同志松村を通じて届けられたもの，『第二無産者新聞』紙上発表のものは同志安田に渡した様に思う。」（二二五頁）最初恰も他人が書いたように見せかけながら，後には自筆になるものであることを認めている。又論文の精密な要約からしても風間自身の執筆になるものと思われる。

二月一五日『赤旗』再刊三四号。[12]

更にこの二月に『共産青年』を『レーニン青年』と改題。紺野，宮川が，共青の東京市委員会を基礎にして発行した。これ以前は主として宮川が，これ以後は紺野が担当した。

又二月には野坂が渡露した。[*]（二六一頁）

（＊）風間「手記」によれば風間が岩田，松村等と相談の上，送ったとあるが，渡部義通発言によれば，当時渡部は湊七良と共に獄内中央委員会からの暗号指令の反訳を担当していたが，何時かは不明だが寒い時期に，「野坂を国外に送れ」なる指令が出てきた。渡部は直ちに岩田義道に連絡，野坂はその直後，二三日にして再び地下活動に入った。[13]

三月以降，コミンテルンの極東ビューローと連絡をつけた。（二六九～二八六頁）当時極東ビューローとの連絡は柳瀬正夢があたり，

（11） この「（？）」は，原文では「山本懸蔵」の横に付されており，それが，宮川自身によるものか，彼の発言の整理者によるものかは，不明である。

（12） この『赤旗』第34号の日付は，1931年1月25日である。『復刻版』（1983）第一巻（第32号・第33号は，同書では欠号となっている）を参照。なお，謄写版刷りである第34号の第1面には，「『赤旗』再刊に際して」と題する声明が掲載された。また，柳瀬正夢の木版による『赤旗』という題字が用いられるようになったのもこの号からである。

この第34号から，1932年4月1日付の第68号（『復刻版』（1983）第二巻）頃までが，戦前の『赤旗』で，記事の内容や挿絵・カットがもっとも充実している時期であった。32年4月8日付の第69号（『復刻版』（1983）第二巻）以降，33年12月11日付の第165号（『復刻版』（1983）第四巻）まで，同紙は活版印刷された。紙面の情報量は，当然，活版印刷化によって大幅に増大したものの，内容の多彩さは，謄写版刷り時代に比べてむしろ減じていったように思われる。

（13） この注は，野坂参三の渡露の経緯について述べたものとして興味深い。

更に松村を通じて行われていた。三月中旬か下旬に呼び出しがあり，四月初旬に紺野が出発して上海に赴き下旬に帰国した。その後二週間以内に風間が再び出発。報告書を提出，ビューローの意見は，

「一．日本の党の歩いている線は一般的に正しい方向に向っている。運動上注意力を集中すべきは大衆的活動方法への転換，合法的舞台の広範な利用，右翼日和見主義との徹底的闘争の必要。

二．日本における農業革命の進展に現在以上の注意を払うこと。中農の下層をも含む大衆的組織としての農民委員会の結成に努力すべきである。

三．第五回プロフィンテルン大会の決議実行の領域においては，まだなすべくしてなされざる多くのものがある。これの克服には党が先頭に立つべきである。

四．社会民主主義政党，改良主義的労働組合の理論と実践に対して決定的に闘争すべきこと。並びに天皇の前に忠誠を誓った「解党派」に対する闘争を行うべきである。

五．中央部員は組織の拡大強化の為に下部組織との直接連絡をとるようなことは必要でもあろうが，充分に非合法的条件を考慮すべきこと。更に運動の渦巻の中に陥って方向を見失わない様，常に大局に着眼すべきである。

六．略――」（二七七～七八頁）

であり，後の連絡方法も講じて来たが，国内のアド――三省堂編集部松本慎一――が検挙され，上海の極東ビューローもヌーラン事件で検挙されて，それ以後，連絡はなくなる。

「政治テーゼ草案」の作成とその批判・「三二テーゼ」発表

一月中旬に結成された四人ビューローは一致して「政治テーゼ草案」に賛成し，一月の終か二月初頃から約一ヶ月かかって紺野，岩田の協力で風間が執筆し，完成した。そして四月には『赤旗』（三九・四二～四四号）[14]に連載し，またパンフレットにした。

この「草案」は，ジョンソン，ヤ・ポルク[15]（コミンテルン極東部に居たこともある。トロツキーズム，ブハーリンとの関係があった）らの意見に負うものであった。この二人は日本においては金融資本がヘゲモニーを握っている，と評価していたので，「草案」も，それに基くものが作成された。

これにはロゾフスキーも同意していたようである。又山本懸蔵も「慎重に審議しろ」とは云ったが「草案」そのものに積極的に反対はしなかった。直接的には風間丈吉，岩尾家定（ワシリエフ）が主体的役割を果していたようである。最も重大な点は，この「草案」がコミンテルンとは殆んど関係なしに作られたことである[16]。紺野，山本にしても，クートベの学生たちにしても，コミンテルンとは直接無関係で，「草案」作成に当ってはクーシネン[17]はじめ片山潜の意見は聴取していないことであ

（14） 第 39 号は，1931 年 4 月 2 日付。第 42 号は，5 月 17 日付。第 43 号は，5 月 31 日付。第 44 号は，6 月 15 日付である。『復刻版』（1983）第一巻を参照。

（15） 不詳。

る。（二九八〜三〇一頁）

かくて，基本的に誤った「テーゼ草案」が出来たのであるが，これに関する党内討議が開始され，十月に大体終結し，「討論集」を出した。

この間，党組織は東京・大阪を中心に拡大し，宗派主義が徐々に克服の方向に向いつつあった。そして三一年八月会議が鶴見で開かれ，中央委員会が確立した。この時の話題は，

一．中央ビューローの活動報告とその批判
二．「テーゼ草案」の討議
三．中央委員選出と専門部の確立

であった。「草案」の討議は勿論反対はなかった。が，慎重に「草案」のままで，大衆討議に付することを決定した。中央委員の選出では風間，岩田，紺野，松村，宮川，田井，源五郎丸，溝上，児玉，後に上田茂樹(*)が加わった。政治局は，風間，岩田，紺野，松村，宮川が，組織部は松村，岩田，紺野，風間，田井，が決った。

（＊）ペンネーム神保。風間とは三二年一月連絡がつく。四月二日行方不明。(18)（三一二頁）

かくて十月に党内討論が終結すると，「政治テーゼ草案討論集」が十月に出されたが，党内では概して賛意を表明していた。獄内中央委員会も賛意を表明した。所が，この過程（三〇〇〜三〇一頁）で，有力な反対意見が海外からもたらされた。三一年八・九月頃帰国した飯島キミが先ず反対意見を伝達して来，次いで山本正美（アレキセーフ）が三一年暮か三二

（16）「この「草案」がコミンテルンとは殆んど関係なしに作られた」という判断は，誤りである。ジョンソン，ヤ・ポルク，ロゾフスキーの関与は宮川自身が認めていることであるし，その「原本」は，先に参照をもとめた立花（1983）（二）で明らかなように，「コミンテルン製」であった。

「三一年テーゼ草案」は，確かにコミンテルン本部の組織的文書ではなく，その実際の文章は，風間ら日本人党員が作成したものである。しかし，当時の日本共産党の綱領的文書が，コミンテルン本部と無関係に作られることはありえない。それについては，風間（1976）pp.68–71，および pp.141–4 も参照。宮川談話のこの文言は，その解散（1943 年 5 月）後にも権威視のつづいたコミンテルンと「三一年テーゼ草案」とを切り離そうとする努力の現れであろう。

ただ，そうした評価の問題を除けば，宮川談話の細部が，当時の「事実」を「事実」として述べようとする姿勢を維持していることは，疑いないと思われる。

なお，コミンテルンの「三二年テーゼ」への転換の有力な契機となったのは，1931 年 9 月における満洲事変の勃発であろう。満洲は当時の日ソ両国にとって安全保障上の最枢要な地であり，そこへの日本軍の一層の進出が，コミンテルンにとって，日本への評価の変化の 1 要因となったのは，彼らの立場からすれば無理からぬことであった。

（17） Kuusinen, O. W.（1881–1964）。フィンランド人。当時のコミンテルンの幹部。「三二年テーゼ」の主要な執筆者であり，それは，――「二七年テーゼ」が「ブハーリン・テーゼ」とも呼ばれるのに対して――「クーシネン・テーゼ」とも呼ばれる。

（18） 特高警察に検挙された上田は，拷問によって死亡させられたと推定されており，その死体の行方さえ判明しないままになった。特高警察による共産党員に対する拷問は，満洲事変勃発以前には，基本的には「痛めつける」という性格のものであったが，事変開始後には，明らかな故意，あるいは未必の故意による殺人にあたる拷問がときに行われるようになった。

年初に『インプレコール』に批判論文を掲載した。更に三二年四月には源五郎丸芳晴が山本の批判を伝達してきて，徐々に「草案」の誤りが明かになり，大体において「二七テーゼ」の方がむしろ基本的に正しかったという意見が党内で決定的になってきた。

この年（三二年）一月にはコミンテルンの方針も決定，三月にはクーシネン報告「日本帝国主義と日本革命の性質」[19]がなされて，「草案」についての根本的徹底的な批判により粉砕された。

このような過程を反映して，二月に『日本資本主義発達史講座』が進捗していたのだが，第一巻の草稿が出来，五月には出版された。二月に，野呂，岩田と三人で，早くできた服部之総の原稿を鵠沼の野呂の家で読んだ記憶がある。

この直後の五月三十日には，独文『インプレコール』に「三二年テーゼ」が発表され，「草案」を批判すると同時に，前年九月にはじまる満洲事変に象徴される戦争とファシズムの時期に対処する基本的な方針が確立した[20]。『講座』は，その直前に第一回配本がなされているわけで，すでに敵前転回をなしとげていた。つまり「草案」の克服はKIによってなされ，ついで中央部の自己批判によって提起されたのであって，特定の個人の力でなされたのではない。

満洲事変がはじまるとそれに対処するため「満洲事務局」を設けた。軍隊内宣伝扇動組織の機関として，軍事部を設け，軍隊細胞が出来，『兵士の友』を刊行。まがりなりにも軍隊内での大衆活動が行われたが，全体としてはなおセクト主義，極左主義の残滓が非常に濃厚であった上に，中央部に巣食うスパイ松村の挑発もあって，党はしばしばフレーム・アップの餌になった[21]。

七月二日『赤旗』特別号に「三二テーゼ」発表に関するもの並にロシア語版KI掲載の「日本の情勢と日本共産党の任務」を発表[22]。

七月一五日『赤旗』八四号に岩田義道が党十周年に関する論文「日本共産党創立十周年

---

(19) このコミンテルン執行委員会幹部会会議におけるクーシネン報告は，「三二年テーゼ」の形成に向う動きとして重要である。その邦訳は，村田（1987）②に「資料51」（pp.176–88）として収録されている。なお，村田訳では，史料原文の題名中の「性質」は「性格」と訳されている。

(20) イタリアのファシズムとドイツのナチズムを，ともに「ファシズム」としてどこまで概括できるかは，その両国の近・現代史の専門家ではない著者の語りえることではない。しかし，その両者による国家権力の掌握の始点を，「選挙民大衆による革命（あるいは「反革命」）」として概括することに，無理はないであろう。

その場合，日本についていえば，「三一年テーゼ草案」の立場からは，かなりの無理を覚悟すれば，「日本ファシズム」について語りえても，「三二年テーゼ」の立場からは，「日本ファシズム」という概念は導出困難であろう。

(21) 「M」こと「松村」が画策した，いわゆる「大森銀行ギャング事件」が起きたのは，1932年10月6日であった。

(22) 『復刻版』（1983）第三巻を参照。「三二年テーゼ」そのものは，1932年7月2日付「『赤旗』特別号パンフレット」で公表された。

記念日に際して，全日本の労働者諸君，すべての働く農民諸君，朝鮮満洲台湾その他の被圧迫植民地民衆諸君，陸海軍の兵士水兵諸君に訴う」を発表した。

一九三二年を通じて細胞を基礎にし，党の地方組織は，かなり順調にのびていった。一般的にいって，党はその基本組織をこれだけ多数化し得たのは空前であったろう。(23)

党は「三二テーゼ」に基いて党の意思を統一し組織を確立すべく全国協議会の開催を決定，九月にはその招集を通知した。各専門部毎に「テーゼ」を作成，持参することになった。予定は十月三十日熱海。所が党内に松村のようなスパイがいたために挑発に乗ぜられ，十月，川崎銀行ギャング事件を仕出かし，(24) 更に，スパイの手引により，各国（各県あるいは全国か）の主要メンバーが一堂に会する熱海には警察の網の目がはられていた。(25)

十月三十日には主脳部の大半が検挙され，残ったのは宮川，児玉，源五郎丸，田井で，宮川の担当していた専門部組織である『赤旗』編集局・農民部・AP部(26)（宮本，野呂，渡辺多恵子，秋笹政之輔，辻（小林多喜二））であった。この四人からなる中央部も，十二月一日，牛込で再建のための会合をする時に一斉検挙にあった。以後AP部に所属した人々を中心にして，中央部が再建されたのであった。

一九五五・一〇・一五

（経済学部教授）

参　考　文　献

石堂清倫・山辺健太郎編『コミンテルン　日本にかんするテーゼ集』青木文庫，1961年。

風間丈吉『『非常時』共産党』三一書房，1976年。（同書には，栗原幸夫「編集まえがき」が付されている。）

小山弘健『日本マルクス主義史』青木書店，1956年。

飛田勘弐「コミンテルンと日本共産党「綱領」の史的展開」（上）『運動史研究』8，1981年。同（下）同誌，9，1982年。

立花隆『日本共産党の研究』（一）～（三），講談社文庫，1983年。

『復刻版『赤旗』』第一巻～第四巻，新日本出版社，1983年。

村田陽一編訳『資料集　コミンテルンと日本』①～③，大月書店，1986/7/8年。

日本共産党中央委員会『日本共産党の七十年』（上）「党史年表」新日本出版社，1994年。

近代日本社会運動史人物大事典編集委員会編『近代日本社会運動史人物大事典』（1）～（5），日外アソシエーツ，1997年。

小林峻一・鈴木隆一『昭和史最大のスパイ・M』ワック，2006年。

寺出道雄『山田盛太郎――マルクス主義者の知られざる世界』日本経済評論社，2008年（a）。

――――『知の前衛たち――近代日本におけるマルクス主義の衝撃』ミネルヴァ書房，2008年（b）。

Lazitch, L., *Biographical Dictionary of the Comintern*, Stanford, 1986.

（23）注（12）で述べた，活版印刷化された『赤旗』第69号の発行部数は，7,000部で，戦前の最大部数であった。なお，これは「三二年テーゼ」公表以前に達した数値である。

（24）注（21）で述べた，「大森銀行ギャング事件」（「川崎第百銀行大森支店襲撃事件」）を「川崎銀行ギャング事件」と呼んだもの。

（25）「熱海事件」等，10月30日の事件全体が，「M」こと「松村」の「作・演出」によるものであった。なお，前出の立花（1983）（二），小林・鈴木（2006）を参照。

（26）「アジ・プロ部」の意味。